

4. コミュニケーション

良いコミュニケーションを育てるために大人の私たちが子どもとどうかかわればよいのか。INREALに学びながら、大人側の問題についても考える。

1. 本校でなぜインリアルをとりあげたか

本校では、ほとんどの子が何らかの形でコミュニケーションに障害を持っている。たとえば自分の言いたいことを一方的に言い放つのみで相手の返事や反応にはとり合おうとしない、話しはできるが問いにそった答えができない、文字は書けるが生活の中でどのように用いたらよいかわからない、自分の思いやしてほしいことを伝える方法がわからず、力まかせに相手にあたったり、泣き叫んだりする。その子なりのパターン化した行動の中では安定しているが、予定の変更でパターンがくずれるとそれに対応できないなど人との関わりがうまくとれずコミュニケーションが成立しにくいことからくる問題が多い。

このことは、基本的な生活習慣や移動、作業能力に比べ、言語、社会性、自己指耐力がひとときわ落ち込んでいるという本校の児童・生徒の実態とも一致している。

そこで学校生活のすべてにおいて人との関わりを大切に、様々な形の集団学習を組織して、子どもどおしに関わり合って学べるようにしている（昭和58、59、60年度研究紀要）

ところで近年、ことばのない子が多くなり、彼らとコミュニケーションをもつには単に話しかけるだけでなく、体の動きや視線をじっくり観察して接することの大切さを痛感している。また、語い数が少なかったり、ことばが使えても1～2語文程度だったりして、自分の気持ちを充分相手に伝えることができず、パニックを起こす子には、単に注意するだけでなく、その子の持っている要求を大人が理解して、ことばで言い表わすことにより、心を通わせることができることもわかってきた。（これらはインリアルでいうところのSOUL〔表1参照〕にあたるであろう）こうして子どもたちと心をより合わせて関わる中で初めて楽しいコミュニケーションがとれ、交流が持てるようになり、その子の生きたことばが生まれるとあってよいであろう。

ところでこの生きたことばを育てるために大切なコミュニケーションをどのような形でとったらよいのであろうか。同じ子どもに対するA先生とB先生の接し方をビデオでみて、子どもとの関わり方が、対照的に違っているのを知った。A先生と接している時の子どもは自発語が少なく遊びが長続きしないのに対し、B先生と接している時は次々と自らの遊びを展開し、満足そうに関わっている。今まで嫌がってしなかった姿勢もとるし発語もどんどん出ている。この違いを目前にした時、私たちは子どものことばの障害を単にその子のみの問題とせず、その子を取りまく周囲の者（大人）との関わりの問題として考えることの大切さを

知った。

本校の教育課程の中には子どもとの関わり方(コミュニケーション)について次のように述べている。

① 言語

- 子どもの障害のみに目をうばわれず、子どもの全体像をとらえるようにする。ことばは親子関係、友達関係に左右されることが多いので、そのような環境について常に気を配る必要がある。
- ことばがなくてもその子の発する声を模倣するなどして相手をし、自由な発声を促す。
- 話すことを励ますような相互の関わりを大切にする。この場合、物(ボール、人形など)を媒介にしたやりとりを楽しむとよい。
- 動作を誇張したり手で触れたり自分で動かしてみたりして、ことばと動作を結びつけていく。
- 次に、指導者の身ぶりや表情を介さなくても言葉のみで理解し、反応できるように静かな雰囲気の中で、適当な大きさの声刺激を与える。刺激はわかり易いようにする。
- 音声伝達の手段であることを知らせる。そのためにことばが必要になる場面設定をし、声をだすことにより相手が反応してくれるという楽しい経験をさせる。
- 子どもの言うことを熱心に聞き、よい聞き手となる。
- その子が最も楽で発声しやすい姿勢をとらせ、緊張の少ない場所や位置を見つける。

(教育課程昭和62年度P 136より)

この中には子どもとの関わりを大切にすることばを育てようということでインリアル技法がすでに多く含まれている(——の部分)が、言語の発達をコミュニケーションの発達の中でとらえ、その子のコミュニケーション上の問題を子どもだけにみるのではなく、その子を取りまく大人も含めた関わり方の問題として考えていく観点が弱いようである。

子どもとの関わり方の大切さから一歩進んで、どのように関わればよいのか、私たちの接し方をもっと細かく系統的にみていきたいと思っている。そしてことばのある子もない子も、「どんな子でもサインをだしている」そのサインを大人がきちんと受容できる力を身につけようというインリアル理念に学びつつ研究がスタートした。

2. 研究の経過

今年度は約10か月という短い期間であるが以下のように研究を進めてきた。

(1) インリアルの基礎を学ぶ（1学期）

① 「INREAL研究」誌の読み合わせをする

a INREALとは（歴史と理論的背景）

b INREALの基本概念及びその方法

SOUL、ミラリング、モニタリング、セルフトーク、パラレルトーク、リフレクティンク、エキスパンション、モデリングなど語句の説明

c トランスクリプトのかき方

② 「INREAL IN JAPAN」のVTRをみる

③ 金沢大学教育学部 大井 学 氏がVTR分析を行っているところを実際に見学する

(2) 自分たちの指導場面をビデオに撮りマクロ、ミクロ分析をする（2学期）

① 中学部3年O君とM教諭のビデオをみて、分析の仕方を学ぶ

② 小学部2年M君とU教諭のビデオをみて、マクロ分析を行なう

③ 小学部6年Y君とN教諭のビデオをみて、トランスクリプトを作る

④ 小学部6年Y君とN教諭のビデオ分析を里見圭子氏（インリアル研究会事務局長）を交えて行う

(3) 研究のまとめをする

① INREALの基本概念と目的についてよりよく理解する

② 研究紀要をつくる

（浦田節子）

3. インリアルについて

(1) アメリカから日本へ

1974年、米国コロラド大学で開発されたINREAL (Inter Reactive Learning and Communication) は、当初、ことばの遅れた幼児の2次障害の予防を目的とし、それまで米国で主流であった課題訓練志向を否定し、自然な遊びを通じて子どもの自発性を尊重しつつことばの学習を援助する指導法として出発した。その後、子どもの言語発達をコミュニケーション行動の発達の中に位置づけ、非言語行動を含めた広い範囲で捉えることや子どもだけでなくコミュニケーションの相手である大人の行動やことばかけも同時に検討するといった語用論的観点に立った発想が加味され、子どもに携わる大人のコミュニケーション・センシティブィティ (感度) の向上を図る色彩が濃くなり、In-class Reactive Language Therapy (教室内での反応的言語療法) から Inter Reactive Learning and Communication) と改められた(1984)。INREALの考えの基本は、「良きコミュニケーション (相互作用) の成立や発展がことばのみならず全ての学習を促す」にある。この考えのもとに、子どもと大人が相互に (inter) よりよく反応しあう (reactive) ための適切な方法を見い出していこうとするものである。

開発当初は就学前の言語発達遅滞児のための障害予防プログラムであったが、現在では、障害の種別をとわず年長児・者にも適用され、さらに二言語併用児 (例、スペイン語と英語) やコミュニケーションの問題、普通学校における読み書き学習など、適用範囲が広がっている。

日本への導入は、コロラド大学でもたれたセミナーの参加者を通じてすすめられてきた (1980～)。主に日本ではことばの教室、通園施設、保育所、病院、養護学校などで受け入れられ、母親指導などにも試みられている。特に「できるだけ話しかけて下さい。よく遊んであげて下さい。」ということばの指導にももの足りなさを感じていた人々が熱心に取り組んでいる。そして、INREALが「良きコミュニケーションの確立」をめざして、その土台となる大人 (母親、保母、幼稚園や学校の教師等) への視点を持つことの重要性に着目し研究を積み重ねてきている。

(2) INREALの基本理念とその方法

① 基本理念

- a、言語のみならず子どもの全ての学習は外界との相互作用を媒介に行われる。INREALの目標は「人との望ましい相互作用の構築」にある。
- b、子どもは環境にたいして自発性、積極性を持つ主体である (active learner)。従って、大人が子どもの自発性を尊重し、反応的に関わることを基本姿勢として子どもの学習を援助する。
- c、ことばの問題を持つ子どもをコミュニケーション障害児として捉え、大人との共有体

験を通した伝達への意欲の向上を基盤として意味の学習や体系化を考える。

d、コミュニケーション能力の指導や評価においては、非言語行動レベルからことばの周辺要素（抑揚、発話速度、リズム等）、会話規則（表4）等の多面的な視点から行う。

e、実践する大人の関わり方も子どもと相互に見直し、適切な環境づくりを目指して大人のコミュニケーション・センシティブィティのレベルアップを図る。

② 方法

上記の基本理念を目指すINREALは、そのための方法として大人の基本姿勢や具体的な関わり方のモデルを次のように設けている。

a、大人の基本姿勢＝SOUL

子どもと出会った時大人はどう関わればよいのか、そのための基本姿勢として提唱されているのがSOULである。SOULは頭文字をとったもので、大人はまず黙って（Silence）子どもが何を感じ、どうしたいのかを観察（Observation）する。そして全身で感じとるが如く子どもの全行動に耳を傾け（Listening）ながら、子どもを理解、洞察（Understanding）しようということである。このSOULは、ひとつずつバラバラに行うものではなく、観察しながら聴き、聴きながら理解するといった子どもとの共有関係を成立させるための大人の心構えでもある。

b、言語心理学的技法——7つの技法

SOULの基本姿勢を守りつつ、さらに具体的、実践的方法として子どもの発達段階に沿ったモデルとして7つの技法が設けられている。この言語心理学的技法は近年の言語発達研究の成果をもとに子どものレベルにあわせるミラリングから、一定の会話ができるレベルのモデリングまでもうけてある。実際の指導では、まず子どもの発達段階に応じた技法を使うことを土台にして、子どもの何をどのように伸ばしてやるかを考察し、そのためにはどんな技法を組み合わせれば効果的かを考えて用いていくことになる。

表1. 大人の基本姿勢SOUL

Silence	…黙って見守り、一人で何かを始めたり考えたりする余裕を子どもに与えましょう。
Observation	…子どもの認知、社会性、言語、運動面などをよく観察しましょう。
Understanding	…子どものコミュニケーションの問題について理解し、子どもに何が援助してやれるか洞察しましょう。
Listening	…子どものリズム、レベルに合わせ、サインをよみとり、自信と意欲をもたせましょう。

表2. 言語心理学的技法

ミラリング……子どものしていること をそのまままねる。	→ 未だコミュニケーションの存在に気付かず、その基本的図式も形成されていない子どもに自分のしていることが他者にどのような意味や効果があるのかを知らせていく。
モニタリング……子どもの出す声やことばをそのまままねる。	→ 子どもの発声、発語意欲を促す効果がある。話題の確立を図る。
セルフ・トーク……大人自身のことをことばにする。	→ 子どもに圧力を与えずモデルを示すことができる。
パラレル・トーク……子どもの気持ちや行動を大人がことばで表現する。	→ 大人が子どもとコミュニケーションしたいという意図を伝える。
リフレクティング……子どもの言い誤りを非難や中傷することなしに正しく言い直して返す。	→ 正しいことばのモデルを聞かせ、聴覚的なフィードバックを適切にし、子どもが自発的に正しいことばに修正し学習することを援助する。
エクスパンション……子どもの言ったことばを意味的、文法的に広げて返す。	→ 話題の維持につながり、より高次の言語学習を助ける。
モデリング……子どもの話題に沿いながら子どもの使ったことばを使わずに普通の会話スタイルで返す。	→ 会話への自信を高め、自分も聞き手であり、役割交代することや相手の意図を読みとり反応していくこと等、コミュニケーション・センシティブリティを磨くことを図る。

(3) 子どもとのコミュニケーション分析方法

INREALの独自性は何よりもそのビデオ分析の手續きにあると言ってよく、コミュニケーションの担い手としての子どもと大人を平等の立場でとらえ分析していく。以下分析の仕方を簡単に紹介する。

① 分析の手順

手順1 - VTR録画 —— 子どもと大人の対一の自由遊びの場面を20～30分VTRにとる。

手順2 - 分析対象場面の選択 —— VTR録画全体を見直し、その中から分析対象者の分析に対するニーズに適切に対応した場面を選択し、少なくとも2分間抽出する。

手順3 - トランスクリプトの作成 —— 抽出した場面にみられる子どもと大人のことばや行動を時間の流れにそって全て書き出す。(参照4の③)

手順4—コミュニケーション評価表の記入— 評価表への記入は、子どもを知っている大人が3～5人で協議しながら行うことが原則となっている。

② 評価表の見方

評価表（45、46頁）には話しことばのあるもの用とないもの用とがあるがここでは前者について簡単に紹介する。評価表は7つの大項目から構成されており、それらのうち、Ⅰの〈どこで〉とⅧの〈まとめ〉は、選択された場面全体で判断し、それ以外は個々に見ていく。

Ⅰ〈どこで〉選択場面全体を通して判断する。大人の位置がコミュニケーションをとる上で適切であったかどうか、SOULは守られていたか、アイコンタクト（視線）はとれていたかなど、子どもと大人の相互関係をみる。

Ⅱ〈誰が〉会話の主導権が誰にあるかをみる。誰が話題を開始したか、又反応したかの回数を数える。子どもと大人の一つ一つの行動が、相手のなんらかの行動に反応して起こったものか、それとも、相手の行動とは関係なく自分の考えに従って起こったものか分類する。

Ⅲ〈子どものコミュニケーション行動の方法や意図〉伝達意図の有無、その伝達方法が非言語（移動、操作、感覚運動レベル行為等）、前言語（視線の移動、指さし、身振り等）、言語（発語や手話を伴う行動）いずれの行動であるかを分類する。そしてその意図は何かを考える。

Ⅳ〈大人の伝達方法、伝達意図〉反応的か又は指示的か、その意図は何かを考える。

Ⅴ〈いつ〉待ち時間の妥当性をみる。

Ⅵ〈自然な会話の成立〉判断基準は・子どもに対して大人が誠意のある姿勢を持つ・会話の原則（表3）を守る・待ち時間が適切な3つである。

Ⅷ〈まとめ〉会話の主導権や子どもの遊び、活動のレベルはどうであったか、子どもと大人の長所、目標についてそれぞれ話し合い、今後の方針とする。

③ 分析の実際

次の項目で私達が行った分析例を紹介するが、分析の対象が誰であるかによって、例えば母親、障害児担当の教師等の役割によって方法や内容がおのずと異なってくる。

以上INREALについて簡単に紹介したが、特に指摘されていることは言語心理学的技法の扱いについてである。あくまで基本的な姿勢が達成され、子どもとの良きコミュニケーションが成立した段階以降においてであり、子どもに先ず育てるべき基礎を作らず技法のみをまねて実施することを厳しくいましめていることを追加しておきたい。

この評価シートの著作権はコロラド大学 INREAL/Outreach 事務局（代表者Dr. Elizabeth Heublein）にあります。日本 INREAL 研究会の許可なくして、使用することはできません。

INREAL Training Evaluation Model (ITEM) - 1
Verbal-Trainer Form
Dyad

子供の名前 _____ 大人の名前 _____
初回録画日 _____ 年 月 日 子供の年齢 _____ 年 _____ ヶ月 生年月日 _____ 年 月 日
評価の日 _____ 月 日 回目録画分 _____ テープ・カウンター _____ ~ _____
注意事項：非言語行動は○で囲んでください。 イニシャルを使って人物を表してください。

I 場所 (判定)	子 供	適 切	過 多 (++)	過 少 (--)
A 位置 関係				
1. 床 の 上				
2. テーブル				
3. 座っていた				
4. 立っていた				
B 相互の 関係				
1. SOULは守れていたか				
2. 視線を合せていたか。(P&I)				

II 誰 が (回数)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	コメント	
A 開 始	1
B 反 応	

III 子 供	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
A どんな方法を使っていたか											2
1. 伝達意図なし											
2. 伝達意図あり											
3. 非言語的行動											3
4. 前言語的行動											
5. 言語的行動											
B その行動の意図はなにか											
1.				6.							
2.				7.							4
3.				8.							
4.				9.							
5.				10.							5

IV 大 人	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
A どんな方法を使っていたか											
1. 反応的行動											
a SOUL											6
b 非言語的行動											
c ミラリング											
d パラレル・トーク											
e セルフ・トーク											7
f モニタリング&リフレクティング	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
1) そのまま真似る											
2) 言い直す											
g エキスパンション	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	8
1) 言い直す											
2) 詳しく述べる											
h モデリング	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	9
1) 叙 述											
2) 質 問											
3) 承 認											
2. 指示的行動											
a 提案的	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10
1) 叙 述											
2) 質 問											
3) 強 化											
b 指示的	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
1) 叙 述											
2) 質 問											
B その行動の意図はなにか											
1.						6.					
2.						7.					
3.						8.					
4.						9.					
5.						10.					

V 待ち時間について	適 切		適 切 で ない	
	子 供	大 人	子 供	大 人
A 相手が行動したり反応し終えるまで待っていたか				
B 相手がしていることを中断しなかったか				

M 自然な会話ができただか	
A ①誠実な状態でしたか ②会話の原則を満たしていましたか ③待ち時間はありましたか	
1.	6.
2.	7.
3.	8.
4.	9.
5.	10.
B 不自然さの段階 (Aで-のついた数の合計数を○で囲んでください)	
自然である	不自然である
0	10

Ⅶ 概 括	子 供	大 人			
		数	適 切	過 多 (++)	過 少 (--)
A 誰が会話をリードしていたか					
1. 開 始					
a 非言語的行動					
b 前言語的行動					
c 言語的行動					
2. 反 応					
a 非言語的行動					
b 前言語的行動					
c 言語的行動					
3. 全体的傾向					

B 活動に使った用具、および、活動のレベル

C 自然な会話

D 長 所

子供

1)

2)

3)

大人

1)

2)

3)

E 目 標

子供

1)

2)

3)

大人

子供の目標を達成するための具体的ことばがけや行動・用具・活動のレベル

1)

2)

3)

表 3. 会話の原則

1. 聞いて話す、つまり交代する。
 2. 二人のうちのどちらかが、会話の話題を提供する。
 3. 相手が話したことについてコメントをつける。
 4. 相手が話し終わるか、又は、その話を変えることを相手に断わらないうちは、話題を変えない。
 5. 真実と思ったことを話す。
 6. 相手に理解してもらうために必要なことを話す。
 7. あなたが言わんとすることを理解してもらえよう努力する。
 8. もしも相手の言うことがわからない場合は説明を求める。
 9. ことばで表わされたことだけでなく表情やジェスチャーなどにも応じる。
 10. いつも、何かしら、それまで知らなかったことを学ぶ。
- これら10項目の要点は、相互の尊敬、話題の共有、相互の理解である。

(榊 蔵 千恵子)

4. 取りくんできたこと ————— 何を確認していったか

(1) 緘黙傾向をもつY君との関わりをVTR分析して

① 本児のコミュニケーション上の問題について

本児は、大人とコミュニケーションしたいという意欲はみられる。休み時間には、自分から、お尻に触れるなど関わりを求めてくる。授業といったような、本児にとって課題が与えられたと感じた場面では、身体の動きが重くなる。口も閉ざされてしまう。更に、だれかが自分に迫ってきたと感じた時には、眼球が小さく左右に動き出し眼振が生じる。

他の子どもたちが、近寄ってくると身を固くして、世話されるままになっている。しかし、力の弱い子に対しては、平気であることができる。本児から、自発的に他の子どもに働きかける場面はみられない。

本児のことばは、単語+ジェスチャー（例「おにぎり」+食べる格好）が多い。また、ダウン症児が持つ発語機能のまずさや会話経験の不足などからと考えられる発音の不明瞭さがある。更に、人に対する緊張が加わり声をセーブするので本児の話は一度で伝わらないことが多い。

本児のコミュニケーション能力を育てるために目標としたことは、「本児が現在もっている大人とコミュニケーションしたいという意欲を伸ばしていく。そのためには、自分が安心して受け入れられる手ごたえを得る中で、他の人と接する上での緊張や警戒をといっていくこと」である。これは、本児に関わる大人が常に留意していくことであるが、特に、本児が大人と一対一になれる週一回の養訓の時間は、本児が自己を表出する場面を作りやすいので十分に配慮していくことにする。そして、上記の目標を達成する際には、インリアルから学ぶことが多いと考えられるので分析してみることにした。

② VTR分析の手順

- a、養訓での一対一の場면을1時間、VTRに撮る。
- b、撮影した場面の中から、2分間だけとり出し、子供（Y君）と大人（教師）の関わりを詳しく書きあげ、トランスクリプト（次ページ参照）を作成する。とり出した場面は大人の関わりの方をみる観点で抽出した。
- c、指導を担当した者を含む6名が集まり、VTRを見ながら、トランスクリプトをもとに分析をしていく。

表4. トランスクリプトの記号

→ 子供と大人の相互関係の成立を示し、伝達意図のある開始に対する反応。
＝ 子供と大人の相互関係の不成立を示し、同時開始、又は、ズレを意味する。

③ VTR分析の実際

Y君とN教諭の粘土遊び場面におけるトランスクリプト（録画 11/4、分析 11/27）

子ども (C)	大人 (A)
1 「ケーキ」とAを見る	1 「うん」と聞き返す (C「ケーキをつくるよ」 A「何ていったの」) (Cの意図が伝わっていない。)
2 「ケーキ、ケーキ」と言う	2 Cを見て考えている。 (C「ケーキなんだよ」と、再度言ったが、Aにはまだ意図がくみとられていない。)
3 「大きなケーキ」と言い、ジェスチャーで示す。	3 「大きなケーキのつもりか」と言う。 (C「ケーキをつくるんだよ。わかってよ」そこで、Aは「ケーキをつくりたかったのか」とわかるが、Cに伝えようという意図が弱く、独り言に終る。)
4 「うん」と言う。	4 「よしよし」と腕まくりする。 (CはAの独り言に反応し、「そうだよ」と答える。) (Aは、Cの次の行動を待たず、もう自分も作ろうとはりきる。)
5 「あ〜 て」と言う。	5 「やっちゃん ちょっとちょうだい」と言う。 (C「自分が作るからしなくていいよ」と言ったが) (AはCの言っていることがわからず、「先生も作るから粘土をちょうだい」と言い、ズレが生じる。)
6 「せった」と言う	6 「小さいケーキ」と粘土をちぎる。 (C「先生だめ、ほくだけ作るから」と言っているが、Aは自分が作ることに熱中し、Cの発語に充分耳を傾けず、「小さいケーキをつくらう」としている。)
7 「……………」と粘土をとり、Aに「ハイ」と、さしだす。	7 「ハイ、ワッー」と受けとる。 (Cは仕方なく、自分の思いをまげAに粘土をわたす。AはCの気持を考えず、喜んで受けとる。)

④ 確認されたこと

a、大人の関わりについて

- 1) 長所・子どものレベルまで下がって遊んでいる。
 - ・明るく、あたたかい
- 2) 目標・ことばは、独り言が多くはっきりしないので、ゆっくりと明瞭に、子どものモデルになるようなことばで子どもに返していく。(トランスクリプト3など)
 - ・大人の思いが先行してしまっている。もっと本児の行動の意図をくみとっていったほうがよい。(トランスクリプト4～6)
 - ・せっかくの子どもの自発語を十分に理解しきれていない。少し待って、子どもの行動を観察する必要がある。(トランスクリプト5～6など)
 - ・子どもの行動や気持ちを言語化していく必要がある。
(例、子どもが粘土をさわっているとき、「トントン」などのかけ声がある。)
 - ・本児には今後、サインも使って会話をしていたほうがよい。

b、子どもの関わりについて

- 1) 長所・相手の気持ちをくみとり、自分をあわせている。
 - ・ことばを使ってコミュニケーションしようとしている。
 - ・楽しく積極的に活動している。
 - ・自分のしたいことをわかってもらおうと何度も話そうとしている。
- 2) 目標・言語が不明瞭である。今後は、伝える言語を持たせたい。そのため、不明瞭な言語を補う手段(ジェスチャーなど)も使っていったほうがよい。

c、分析を通して学んだこと

- ・細かく分析していくので、最初は問題なさそうに見えた場面でもズレが生じていることがわかった。(トランスクリプト4～6)
- ・何度かくり返してVTRを見ることによって、本児の不明瞭なことばの意味するものがわかってきた。(トランスクリプト3～6)
- ・担当者だけでなく、6人で分析したので、より客観的になった。
- ・大人の関わり方の大切さを具体的に知ることができた。
- ・大人の関わり方の手だてを知り、次回、ともに接する時の参考になった。
- ・SOULの大切さがわかった。
- ・待ち時間の大切さがわかった。
- ・子どもの行動について、一つひとつその意図をさぐり、それを言語化するやり方はわかりやすい。今後、子どもに接する時、役立つ。
(宮下信子)

5. まとめ

いま、私たちは子ども達がまわりの人と関わりを持ち、意志を通じ合うことを育てる手がかかりをつかみかけたばかりである。コミュニケーションを育てる上で、基本になることは子ども達の言語環境を整えることと子ども達からの発信（サインやことばなど）をたいせつに受けとめ、子ども達が学ぶ形で返すことである。

具体的には毎日の生活のすじ道をつけること、つまり、子ども達が一日のリズムをつかむことで見通しを持って生活するようにさせる。また、好きなこと、熱中するものがない子には集中することを作り、できるようにさせることなどである。

子ども達が情緒的に安定し、できることが増えてくると、ことばのない子でも自分から指さしをして欲求以外にまわりの事物や状況を教師に言語化してほしがるようにってくる。遊びの中で子ども達がしていることや声・表情などを受けとめるうちに子ども達と教師とのコミュニケーションがとれるようになる。子どもの言ったことをもう一度ことばでくり返すことで子どもは自分の言ったことを認めてもらったと思い、また、ことばを言うのである。これがインリアルなモニタリングにあてはまるのだと私たちは学んだ。

子ども達が日常生活の中で理解できないうちに次の場面に移ってしまうことやどうしていいかわからなくて体をかたくしているのにそれを見すごしてしまう場面が見られる。先にも触れたがまず、子ども達が慣れ、理解できる生活、少しずつ自主的に行動できる生活環境を整えることがたいせつである。そこからまわりの人との関わりを持ち、広げ、豊かに育っていくようなコミュニケーションの素地づくりを心がけたい。その上で、じっくりと子ども達に接し、同じ学校で学び合う教師と子ども達との望ましいコミュニケーションのあり方をさぐっていきたいと思う。いま、私たちはインリアルを学んで、次のようなことがらを確認した。

- ① 子どもだけでなく大人側の関わり方にも目を向けていくことのたいせつさを知った。
- ② 「どう関わったらよいのか」の具体的・実践的方法を知ることができた。特にことばのない子に対しては視線や身ぶり・発声などを見逃さないで受けとめて関わることのたいせつさを知った。
- ③ 皆でビデオ分析をすることにより一人よがりではなく客観的に自分の実践をふり返る力が身についてきた。
- ④ 子どもの行動をとらえる時、視点を持って接することができるようになり、以前よりよく、子どもが見えるようになった。

私たちはインリアルを知ったばかりであるが、ビデオ分析などによってまわりの大人の関わり方が違うとハッとするような子どもの新しい面を見ることができた。また、子ども達が出しているサインを見逃していることにも気づいた。これからも、子ども達を育てる関わりをたいせつにしながらコミュニケーションについて学び、とりくんでいきたいと思っている。

（清水育子）